

# 定林寺芝の前1号墳測量調査報告書

2013年3月

高知大学人文学部考古学研究室



# 定林寺芝の前1号墳測量調査報告書

2013年3月

高知大学人文学部考古学研究室



## 例　言

---

- 1 本書は高知県南国市岡豊町定林寺字芝の前に所在する定林寺芝の前1号墳の測量調査報告である。
- 2 本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって調査を実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 3 本調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」の一部を使用して実施した。本書の印刷には、高知大学人文学部長裁量経費を使用した。
- 4 調査期間は2012年8月24日から9月7日である。
- 5 挿図のうち、図1・2・5・8の方位は真北を示し、図6・7の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 6 調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生・人文学部1・2年生と同志社大学学生が参加した。参加者は以下のとおりである。大江景子・国沢知香・野口真未・又吉幸嗣・清水春花・平尾英希・西垣克哉・中原朋美・松浦祐樹・稻井瑛理香・田中寧音・三輪紘士（以上、高知大学学生）、安岡早穂（同志社大学学生）。整理作業には上記の多くの学生が参加したが、とくに平尾と大江奈が主力を担った。
- 7 写真の撮影は清家が担当した。
- 8 調査の実施にあたり、地権者様・地元自治会・南国市教育委員会より多大な協力をいただいた。
- 9 石室の左右は、玄室奥壁から羨道を見た場合の方向を指す。
- 10 本書の執筆・編集は清家が担当した。

## 目 次

---

第Ⅰ章 調査経過	1
1 古墳の名称	1
2 周辺の遺跡	1
3 調査の経緯と経過	3
4 謝辞	4
第Ⅱ章 調査成果	5
1 古墳の立地	5
2 墳丘測量の成果	5
3 石室実測の成果	6
第Ⅲ章 まとめ	11

## 図版目次

---

### 図版

1 1 古墳の立地	
2 墳丘（北から）	
2 1 石室入口	
2 2 羨道・玄室	
3 1 玄室奥壁	
3 2 玄門	

## 挿図目次

---

図1 南国市と古墳の位置（矢部製図）	1
図2 周辺の主な古墳（清家製図）	2
図3 作業風景	3
図4 調査中の1コマ	3
図5 定林寺芝の前1号墳の立地（清家製図）	5
図6 墳丘測量図（大江奈製図）	6
図7 石室実測図（平尾製図）	7~8
図8 定林寺芝の前1号墳と小蓮古墳の位置（清家製図）	11

# 第Ⅰ章 調査経過

## 1 古墳の名称

定林寺芝の前1号墳は高知県南国市岡豊町定林寺字芝の前に所在する。本古墳は『南国市史』(廣田1979)ならびに『高知県遺跡地図』(高知県教育委員会1998)には「定林寺芝の前1号墳」名で掲載されているが、『高知県史』考古篇(岡本1968)では「定林寺芝1号墳」の名前で紹介される。南国市教育委員会と協議し、本書では定林寺芝の前1号墳の名前を採用する。

## 2 周辺の遺跡

土佐には、古墳時代前半期に属する古墳は極めて少なく、また明確な前方後円墳も未だ確認されていない。前半期にさかのぼる可能性を持つ古墳は、幡多地域には宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曾我山古墳、高知平野には南国市長畠2号墳と南国市狭間古墳などがあわざかにあるのみであり、よって土佐の古墳のほとんどは横穴式石室を内包する後・終末期古墳である。

南国市は、後・終末期古墳が集中する地域の一つであり、土佐では初期に属する横穴式石室が展開するエリアでもある。土佐では、平面形が長辺の短い長方形をなし天井を強く内側に持ち送る明見3号型の石室が横穴式石室として最初に導入される(清家2010)。長畠4号墳・明見彦山3号墳・蒲原山東1号墳と2号墳がそれに相当し、いずれも南国市に存する(図3)。これらの古墳はおおよそTK10型式期新相からTK43型式期の古墳とされる。TK43型式期には香美市土佐山田で伏原大塚古墳が築造されるが、これは舟岩型石室<sup>(1)</sup>の初現と考えられる。TK209型式期になると、高知平野の広い範囲で舟岩型横穴式石室墳が数多く築造される。南国市においては高知県最大規模の古墳群である舟岩古墳群や、土佐三大石室のひとつである小蓮古墳などが築かれるが、これらは定林寺芝の前1号墳の1.7km東にある。つまり、定林寺芝の前1号墳は、土佐の中では早くに横穴式石室が展開した南国市にあり、かつ高知平野の盟主的存在と考えられる小蓮古墳の近くにあるのだ。このことから、定林寺芝の前1号墳は小蓮古墳を頂点とした高

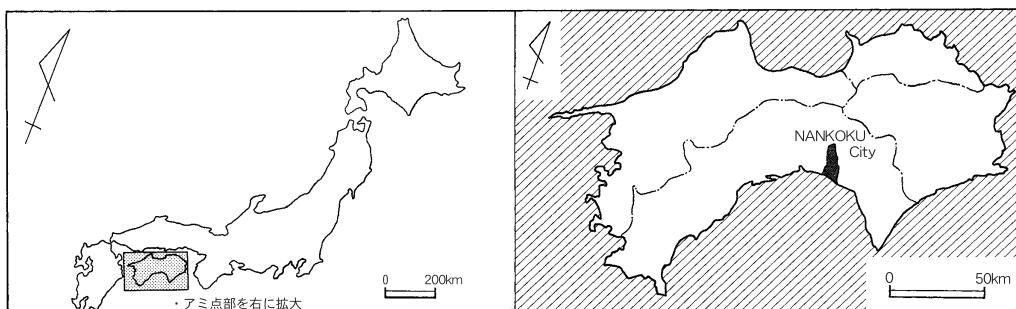


図1 南国市と古墳の位置

## 2 周辺の遺跡



図2 周辺の主な古墳

知平野の社会構造を理解するのに欠くべからざる存在といえよう。

定林寺芝の前1号墳が属する定林寺古墳群は3基から構成される。いずれも横穴式石室を持つ古墳であるが、2号墳と3号墳は石室・墳丘ともに遺存がよくなく、その詳しい内容も知られていない。  
(清家)

### 3 調査の経緯と経過

**調査の経緯** 高知大学考古学研究室代表の清家は科学研究費「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」の交付を受け、高知県における横穴式石室の基礎資料を整えてきた。2010年度には南国市坂ノ松古墳、2011年度には香美市小倉山古墳の墳丘測量・石室実測調査を実施し成果を公表したところであった(高知大学2011・2012)。さらに南国市明見彦山1号墳の発掘調査を2010・2011年度に実施し、石室の内容と墳丘の構造を明らかにしてきた。その中で、高知県のTK209型式期以降の古墳は、風水の立地にあるものが多いことが明らかになってきた(清家2012)。瀬戸内の古墳の中にも風水の地形にある古墳が存在し、風水的立地を鍵として瀬戸内と南四国の関係を考えることができることを指摘した(清家2012)。しかし、高知県の古墳に関する基礎資料は十分でなく、風水的地形にある古墳の研究はまだ途上である。2012年2月ごろ村上隆雄氏によって定林寺芝の前古墳群や長畠1号墳などを案内された清家は、定林寺芝の前1号墳が谷地形の奥部に立地し、風水的立地にあることを認めたのであった。上記のことから定林寺芝の前1号墳は、瀬戸内と南四国の関係を問うという科学研究費の課題に貢献できる資料であると考えた清家は、本古墳の墳丘測量と石室実測を企画し、南国市教育委員会と相談し、地元の方々のご協力を得て2012年夏季に調査を行うこととなったのであった。

**調査経過** 調査は2012年8月24日から開始し、同年9月7日に終了した。調査団を墳丘班と石室班に分け調査を実施した。墳丘班は閉合トラバースを設定し、石室班はレベル移動を行った。その後、石室班は実測のための基準線を設定し、10分の1スケールの実測図を作成した。墳丘班はさらに2班に分かれ、平板を用いて100分の1墳丘測量図を作成した。  
(清家)



図3 作業風景



図4 調査中の1コマ

#### 4 謝辞

### 4 謝 辞

本調査を遂行するに当たり、地権者の方には古墳の調査を快諾していただき、地元の方々にはさまざまな援助をいただいた。南国市教育委員会からは、地元との交渉など作業の円滑化に関してさまざまな援助を賜った。以上のようなご協力を得て、本調査は遂行することができた。お世話になった皆様方に心よりお礼を申し上げたい。

(清家)

### 注

(1)舟岩型石室（東1997）とは、畿内型横穴式石室に似て、細長い長方形の玄室に短い羨道を持つ石室である。

### 参考文献

- 東 潮 1997「大里2号墳をめぐる諸問題」『南海・大里2号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島：pp. 66-83
- 岡本健児 1968『高知県史』考古編 高知県、高知
- 高知大学考古学研究室編 2011『坂ノ松古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第9冊 高知大学考古学研究室、高知
- 高知大学考古学研究室編 2012『小倉山古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第11冊 高知大学考古学研究室、高知
- 廣田典夫 1979「後期古墳時代」『南国市史』上巻 南国市、高知：pp. 189-316
- 高知県教育委員会 1998『高知県遺跡地図』高知県埋蔵文化財調査報告書第43集、高知
- 清家 章 2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の諸関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143
- 清家 章 2012「高知市朝倉古墳の立地と選地」『古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係』高知大学考古学調査研究報告第10冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 7-20

## 第Ⅱ章 調査成果

### 1 古墳の立地

高知市から県道384号線を東へ走り、一宮を過ぎて逢坂峠を越えると北側に四国山地の南端に位置する小丘陵が連なる（図2・5）。南側にも同様の丘陵が連なり、両側の丘陵に挟まれてあたかも狭い谷地形が東西に延びているように感じる。県道384号線はその谷底を走る感覚である。さらに東に進むと南側の丘陵はひとたびとぎれ、南側のみ視界が広がり、高知大学医学部キャンパス（旧・高知医科大学）が見える。県道384号線と高知自動車道はともに東西方向に走って途中で交差するが、両者が交差する箇所の北西に古墳は位置する。この場所は先述の通り四国山地の南端に位置しているので、南北方向の谷筋がいくつも形成される。その谷部の一つの奥側で、尾根の頂部からやや谷部におりた箇所に古墳は存在する（図5）。

（清家）

### 2 墳丘測量の成果

閉合トラバースを組んだ上で平板にて100分の1地形図を作成した（図6）。マウンドは横穴

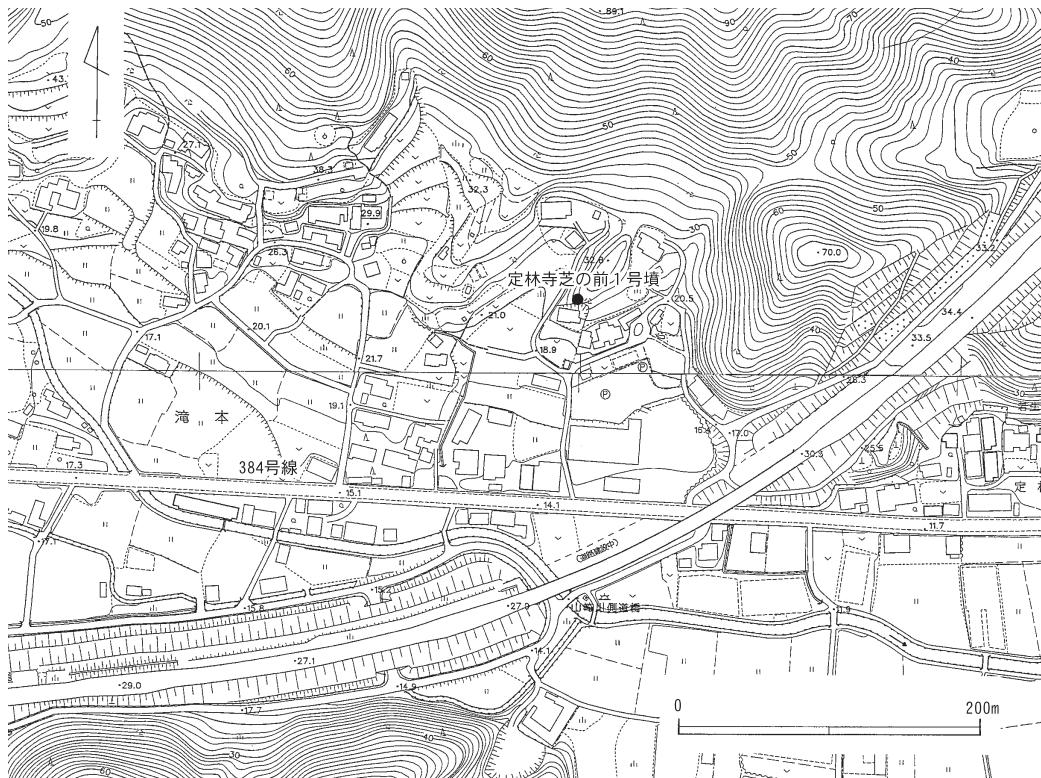


図5 定林寺芝の前1号墳の立地

## 6 墳丘測量の成果

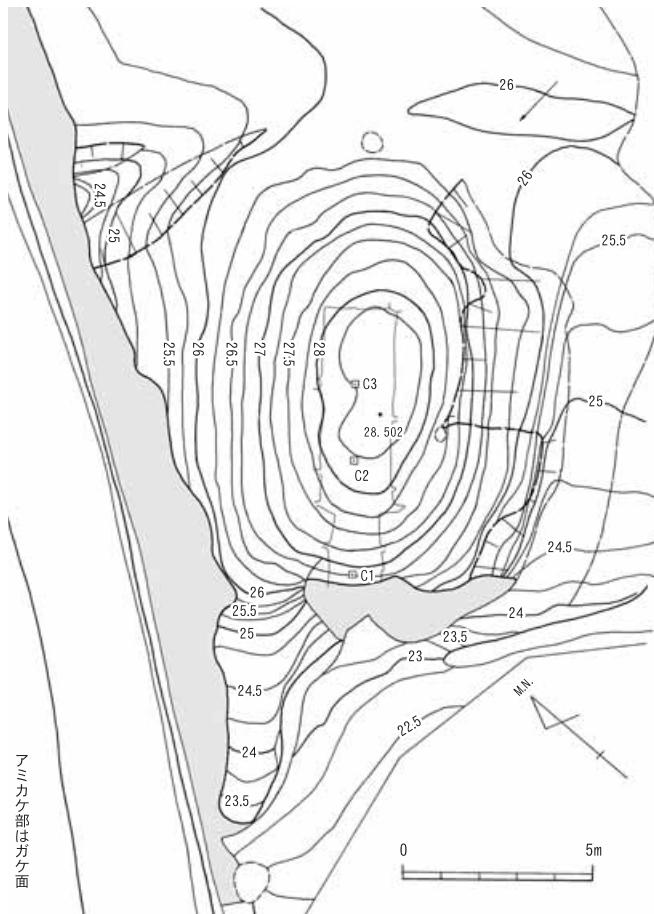


図6 墳丘測量図

しているので、ここも削られている可能性が高い。墳丘北側は西の道路側から谷筋が入り、東も浅いながらも谷地形をなしているので、この部分が墳丘端である可能性がある。しかしながら、本古墳の墳端や規模・墳形を明らかにする情報はこれ以上ない。墳丘の残存状況から直径（一辺）13m以上の規模を持つことだけが明らかである。墳丘の詳細については発掘調査の成果を今後待ちたい。

（清家）

## 3 石室実測の成果

玄室はおおむね原形を保っているが、現状の羨道部入口より南側は崖面をなしているので、羨道は現状よりも長かった可能性はある。それ以外はおおむね原形をとどめているようで、石材が傾いたり脱落するなどの壊れた箇所は特に認められない。

玄室は長方形の平面形をなす。奥壁は基底石を1石置き、左右両辺はともに長さ1.8~2.5mの巨石を基底石として2石並べて基本的な平面形を形作る。左側壁は、大きな側壁基底石と奥壁の間に長さ約40cmの石が置かれているように見えるが、これは基底石でなく基底石の上に積

式石室を中心に長軸13m・短軸11mの隅丸長方形形状に残っている。墳頂部の高さは標高28.502mである。墳丘北側の平坦面の高さは26.000m前後で、石室床面の現状の高さが24.000m前後であるから、墳丘の高さは2.5~4.5m余りであったといえよう。

ただ、古墳はもう一回り大きかった可能性がある。古墳の北側は丘陵を削平して造成したと思われる平坦面があり、古墳の南側は住宅が建設され石室開口部から南は崖状となっている。古墳の西側も道路が通っており、道路に向かって法面が形成されているので、墳丘の一部は削られていると見るべきであろう。墳丘東側も大きく崖面をな

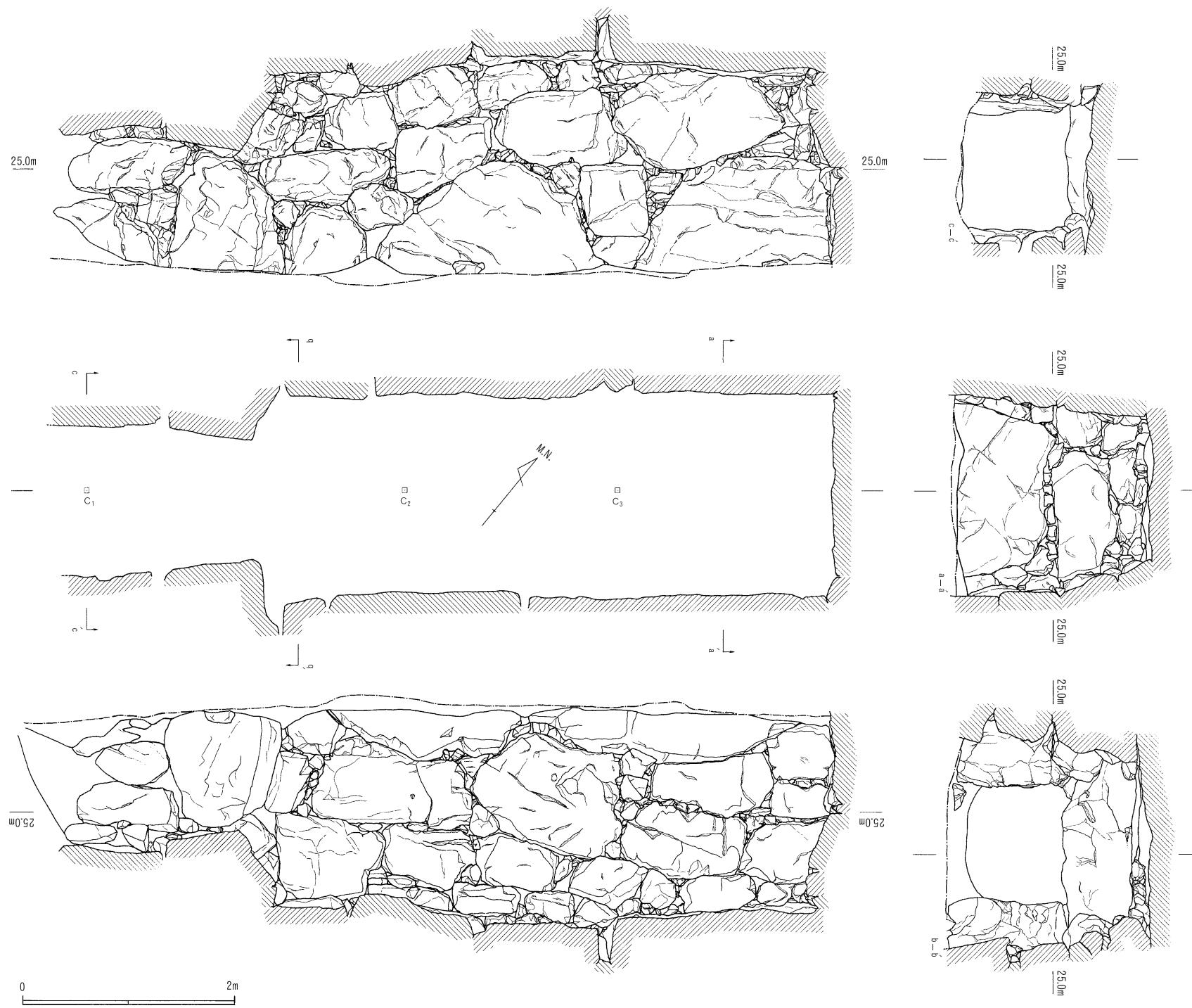


図7 石室実測図

まれた2段目の石材であると考えられる。羨道は左右ともに玄門立柱石ともう一石から構成されているが、羨道前面が削平されているので羨道は現状より長かった可能性が高い。羨道入口に向かって「ハ」字状にやや広がる。

奥壁は、台形の鏡石を1石置き、その上に3段の石材を置く。基本的に4段の石材を積んでいるのであるが、最上段の石材は下から3段目と天井石の隙間を埋めるような薄い石材である。鏡石と左右両壁の間にできた隙間にもやや細長い縦長の石材を幾つか詰めている。

玄室左側壁は奥側で基底石を含んで4～5段の石材を積むが、天井がややレベルを下げる玄門側では3段となる。羨道は玄門立柱石が見上げ石を支え、羨道入口側はおそらく4段の石材を積んで羨道天井石を支える。

玄室右側壁の奥壁側は基底石の上に大きな石材を積み基本的に2段構成である。しかし上段の石材は整った矩形ではないため奥壁や天井石との間に空間ができ、そこには人頭大の石材が置かれる。玄門側では基底石を含んで基本的に3段で壁面は構成される。総じて右側壁の方が左側壁よりも石材が大きく段数が少ない。羨道部もその状況は同じである。玄門部は玄門立柱石が見上げ石を支え、羨道入口側はおそらく基本2段で天井石を支える。左側壁よりも石材はやや大きく段数は少ない。

天井石は玄室に4枚、羨道部は2枚が残っている。天井石は奥壁側の2石はほぼレベルが同じであるが、奥から3石目の天井石はレベルを玄門に向かって下げるよう設置されている。羨道部の天井は水平である。

以上のことをまとめ石室の規模等も併せて示すと以下のようになる。本石室は両袖式であり、袖部は羨道側にせり出さない。玄室は長方形に近い。現状における石室全長は7.29m・玄室長5.43m・玄室幅(奥壁部分)1.90m・同幅(玄門付近)1.95m・羨道残存長1.87m・羨道幅1.36mである。石室はS-50°46'38"-Wの方向に開口する。石室石材は秩父帶から産出される砂岩・チャート類である。(清家)



### 第Ⅲ章　まとめ

測量調査の結果、定林寺芝の前1号墳は直径（一辺）13m以上の古墳であると考えられた。墳形は不明である。墳丘裾部が削平を受けている箇所が多く、規模と墳形については発掘調査を行って明らかにしたい。

横穴式石室の現状における石室全長は7.29m・玄室長5.43m・玄室幅（奥壁部分）1.90m・同幅（玄門付近）1.95m・羨道残存長1.87m・羨道幅1.36mで、両袖式石室であることが明らかとなっている。畿内型横穴式石室によく似たいわゆる舟岩型の石室である（東1997・清家2010）。今回、正確な図面を作成した結果、玄室面積は約10.5m<sup>2</sup>となることが明らかになった。この規模は筆者の石室分類では大型にあたる（清家2007）。

筆者の分析によれば、玄室面積10m<sup>2</sup>以上の大型の舟岩型石室は、河川や丘陵で区画される領域を治める地域首長墓である（清家2007）。さらに、玄室面積14m<sup>2</sup>を超える特大型石室は、地域首長の上位にあって少なくとも高知平野を治める盟主的首長であろうと考えている。

定林寺芝の前1号墳の東側1.7kmには特大型の小蓮古墳があり、小蓮古墳に隣接する丘陵上には土佐で古墳数が最も多い群集墳である舟岩古墳群が存在する。小蓮古墳と舟岩古墳群はTK209型式を中心とする古墳と古墳群であり、定林寺芝の前1号墳も石室形態から見ればおそらく

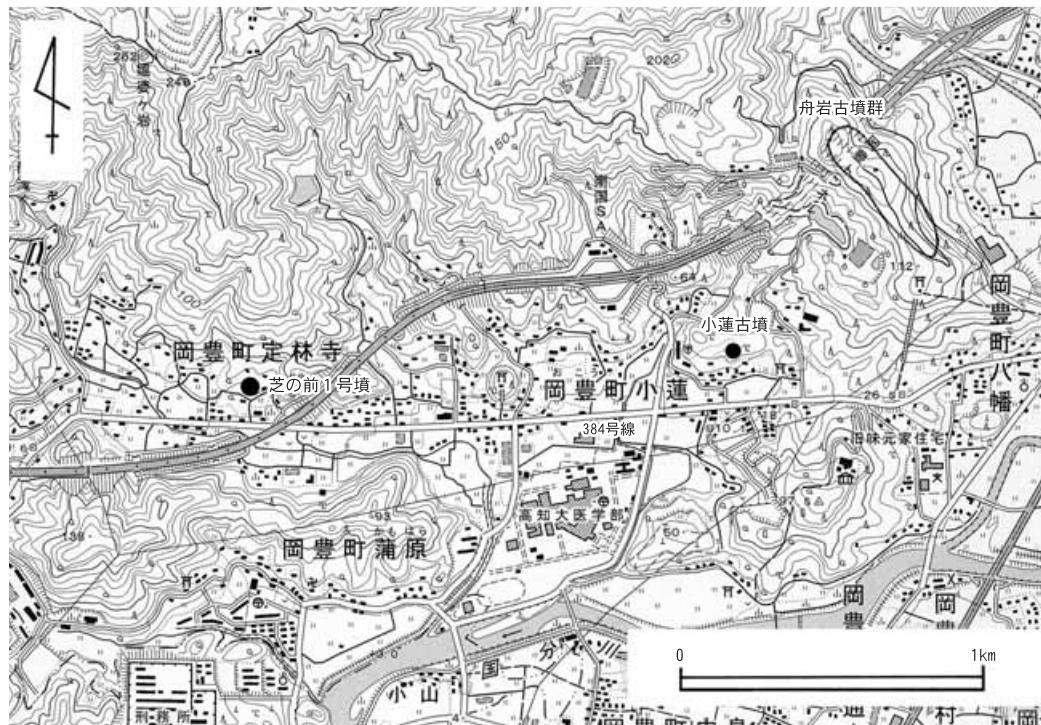


図8 定林寺芝の前1号墳と小蓮古墳の位置

く同時期の古墳と考えられる。本古墳の石室が大型に属することから、本古墳の被葬者は地域首長格の被葬者と推察されるが、それにしては高知平野の盟主的古墳である小蓮古墳とそれを支えたと考えられる舟岩古墳群と距離が近い。定林寺芝の前1号墳の被葬者がどの地域を治めており、小蓮古墳や舟岩古墳群の被葬者とどのような関係を持っていたのか、興味深い問題である。こうしたことが具体的に判明すれば、古墳時代の社会構造や支配構造とその変化が浮き彫りになるだけに重要な課題といえよう。発掘調査を経て検討したい。

立地の問題も重要である。本書第I章でも述べたが、本古墳は南北に延びる谷筋の奥に位置する。これは来村多加史のいう谷奥部密着型に相当し（来村2004）、風水的立地にある。土佐の古墳に関する風水的立地に関しては、筆者がその様相をまとめたことがある（清家2012）。定林寺芝の前1号墳もその例に加わったのである。特大型の小蓮古墳も風水的立地にあるが、両古墳は、四国山地と丘陵に挟まれた県道384号線の北側に位置することで共通する<sup>(1)</sup>。逆に県道384号線の南側の丘陵には古墳はほとんど知られていない。この理由については風水の影響を考えるうまく説明できる。県道384号線は南北を山に挟まれており、景観としては東西に走る大きな谷部にあたる。小蓮古墳はその北側の丘陵にあって、古墳のある小尾根の両側から小さな尾根がやや突出する。これは典型的な風水的立地にある大和の桜井市安倍文殊院東古墳・西古墳や天理市峯塚古墳（来村2004）に類似する（清家2012）。県道384号線の通る谷部的景観は風水的立地として理想的と考えられた可能性がある。さらに横穴式石室は土佐においても南方に開口することが原則である（清家2007）。風水的立地と石室の南開口という原則を満足させるために県道384号線北側の丘陵が有力者の墓域として選定された可能性は高い。なお、県道384号線の南側丘陵には蒲原山東古墳群が存在するが、これらはTK43型式期に属し、風水的立地にはない可能性が高い。蒲原山東古墳群は時期的な理由から風水の影響を受けなかつたものであろう。TK209型式期に至って、風水の影響が土佐に及んで県道384号線の北側丘陵が墓域に選定された可能性が考えられよう。

（清家）

## 注

(1) 前稿（清家2012）では、県道384号線のことを旧名の国道33号線と記していた。ここに訂正する。

## 参考文献

- 東 潮 1997「大里2号墳をめぐる諸問題」『海南・大里2号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島：pp. 66-83
- 来村多加史 2004『風水と天皇陵』講談社現代新書、東京
- 清家 章 2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社、京都：pp. 447-464
- 清家 章 2012「高知市朝倉古墳の立地と選地」『古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係』高知大学考古学調査研究報告第10冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 7-20

図 版





(1) 古墳の立地 (▲の交差する箇所が古墳の位置)



(2) 墳丘 (北から)





(1) 石室入口



(2) 羨道・玄室





(1) 玄室奥壁



(2) 玄門



**【報告書抄録】**

ふりがな	じょうりんじしばのまえいちごうふんそくりようちょうさほうこくしょ				
書名	定林寺芝の前1号墳測量調査報告書				
副書名					
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告				
シリーズ番号	第12冊				
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：清家 章）				
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室				
所在地	高知市曙町2-5-1				
所収遺跡名	所在地			コード	
				市町村	遺跡番号
定林寺芝の前 1号墳	高知県南国市岡豊町定林寺字芝の前			204	040048
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
33°35'55"	133°36'08"	120824~120907	0m <sup>2</sup>	学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
定林寺芝の前 1号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室		墳丘測量・ 石室実測調査

---

**定林寺芝の前1号墳測量調査報告書**

－高知大学考古学調査研究報告第12冊－

2013年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室  
 発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1  
 印刷 有限会社 西村謄写堂

---

